
屋上短編

折角全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上短編

【Nコード】

N0996Z

【作者名】

折角全

【あらすじ】

屋上で会話しているだけの短編。

（前書き）

しばらくぶりにプロットなしの短編。落ち込んでいる時は読まない
ほうがいいかもしれません。
屋上って青春です。

教室の雑踏が、とてもうるさく感じられる。

誰かが騒いでいるわけでもない。先ほどの授業はどうだったとか、友人に面白い話を聞いたとか、そういう他愛のない話。それがとても鬱陶しい。

きつとこれは我儘だ。誰かが私にうるさく話しかけているならともかく、周りが周りで好きに話しているだけなのだから。

ただ私に友人が少ないから、周りの雑踏がまるで私と皆とを分ける明確な差のような気がして、それで理不尽に怒っているだけなのだ。

あの雑踏の中か外か。その立場による、感じ方の違いなのだ。

教室にかかっている時計を見る。休憩時間はまだ残っている。

私はなるべく静かに椅子を引いて、目立たないように教室を出た。不用意に音を立てて雑踏の一部になることも、目立ちすぎて雑踏から奇異の目で見られることも嫌だった。

教室を出ると、早足で廊下を歩く。目的地は決めていた。

最近、自殺というものをよく考える。

特に何か嫌なことがあったというわけでもない。倦怠感というのだろうか、そこにいるだけで無性に疲れる。死にたいとも思わないが、生きていたくなくなる。嫌なことを一つ挙げるなら、この世に生まれてきたことかもしれない。

そんなとき、私はよく学校の屋上に行った。

本来立ち入り禁止の屋上には、他の人は誰も来ない。出入り口には鍵がかかっているが、横の窓を開ければ簡単に出入りできた。

下から見つからないよう角度に気を付けながら、屋上で益体もないことを考える。

この校舎は五階建てだから、飛び降りたら恐らく死ねるのだろう。地面がコンクリートで舗装されているのも、私にとっては好都合な

のかもしれない。

私が自殺をするとしたら、きっと飛び降り自殺だと思う。

一度死なない程度にリストカットをしようと思ったことがあるが、刃物が怖くて皮膚の一枚も切れなかった。首吊りや練炭も考えたが、きつと私には事前準備が必要な自殺は向いていない。用意している途中に怖くなる、その程度の意味しか私にはないのだ。

だから飛び降り自殺である。立ち入り禁止のこの屋上には、周囲にフェンスすらもない。一時の気の迷いで屋上の端まで進んだら、後は足を滑らせるだけで私は死んでしまっただろう。

ぼんやりと雲を眺めていると、少しだけ気分が落ち着く。

携帯を開いて、時計を見た。休憩時間はもうあまり残っていない。「ああ、今からでも死んでしまおうかな」

呟いて、それから首を振る。

私は立ち上がると、窓から校舎の中に入った。

まだ私は生きているから、授業を受けなければならないのだ。

私は部活には所属していない。

一年生の頃、なるべく活動が簡単そうな文科系の部として、美術部にいたこともあった。しかし思った以上に緩い空気は逆に一種の慣れ合いを要求していて、人付き合いの悪い私は数カ月で退部した。だから私は放課後にも、時々屋上に足を運ぶ。

「少し、寒いかな」

携帯を開いて、時間を見る。待ち受け画面のカレンダーが目に入った。ようやく秋が過ぎて、そろそろ冬になる。

「手袋を用意しないと」

ここにいると、独り言が多くなる。最近は屋上以外でも独り言が出るようになって、少し気になっていた。

「死んだときに、独り言の多い女だとか思われていたらやだな。あ

「でも死んだら関係ないのかな」

気にしていても、独り言はすらすらと口をつく。

「死んだ方が、いいのかな」

「その一言を待っていました!」

死ぬだのなんだの言っていたものの、心臓が止まったかと思った。予想だになかった他人の声に、慌てて後ろを見る。

屋上の出入り口の陰に、一人の女生徒が立っていた。この屋上で他人と会ったのは初めてだから、驚きを隠せない。しかも彼女は、顔の前に左手を当てて肩を斜めにした、なにやら奇抜なポーズをとっていた。

「え、ああ、え、えあ」

驚きすぎて声が出ない。

「驚きすぎて声も出ないようですね!」

お前のせいだお前が言うなと言いたいが、声が出ない。

「あ、あなた、誰よ」

人間は正体不明のものを怖がるそうである。苦心して出した私の言葉は、そういう言葉になってしまった。

「私は糸川毬音と言います」

「マリネ?」

「毬音です」

「あの、酢の物っぽい奴? 酢と油と、それに味付けして漬ける奴」

「え? 酢の物?」

「マリネって料理があるじゃない」

「あ、そんなのあるんですか。へー、勉強になりました」

毬音は人名だそうである。

とりあえず私も名乗っておくと、毬音は私の名前も食べ物みたいだと笑った。よく言われることなので、あまり気にはならなかった。毬音は私の隣に座った。私は隣に人がいるのが苦手だった。隣にいるくらいなら対面の方がいい。この距離は近すぎる。

「それで、何か用? そもそもなんで立ち入り禁止の屋上にいるの

？」

「そうそう、それでした。ほら、さっき、死んだ方がいいとか言っていたじゃないですか」

聞かれていたことは分かっていたが、改めて言われるとなおさら死にたくなった。

「言ったわよ。悪かったわね。ネガティブな独り言聞かせちゃって」「いえいえ、悪くなんてないですよ。で、自殺とか考えてるんですか？」

「……考えたことは、あるわ」

毬音は普通なら近寄りたくもない話題に、無遠慮に踏み込む相手だった。

「それがあなたになにか関係あるの？」

「あるんですよ。実は私、とある団体に所属しております」

毬音の言葉に、少しピンと来た気がした。

宗教団体とかだろうか。自殺はやめましょう、神がきつと救ってくれます、ただしこの壺を買えばとか言ってくるんだろうか。見たところ彼女は壺を持ってはいない。

「自殺に関して他人からどうこう言われたくないわ」

「えー、そう言わずに。私、プロですよ」

「宗教ならお断り……」

「何を隠そう私、人口削減のため自殺行動を推奨する会、略して」JSの会員なのです！」

推奨された。

この少女は私を驚かせるのが目的なんじゃないかと一瞬思った。

「え、なにその変な会……」

「変じゃないですよ！聞いた話だと、今の世の中は人が多すぎるそうです。この状況を打開するには、死ぬべき人が死ぬべきだと教わりました！」

変な宗教よりなお性質が悪いと思った。

「人が多すぎると思うならまず自分が死ねばいいじゃん……」

私の言葉が辛辣になったのは、動揺のせいである。本音とかではない。

しかし毬音は私の言葉に勢いよく立ちあがった。

「そ、それは盲点でした！ 私が死ねばよかったのですね！」

目を輝かせた毬音の襟首を掴む。この屋上は私の自殺ポイントである。彼女にそういう用途で使われては、間違いなく立ち入りの規制が強くなる。

「そんなに簡単に死ねるなら、私を殺してよ」

「自殺幫助は犯罪なので、JJSの会則で禁止です。同意殺人はなおさら」

襟首を掴まれたまま、彼女はあっけらかんと言った。

「本当に変な会……何が目的なのよ」

「自殺したい人は死ぬべきという真実を広めることです。最近は安楽死運動に力を入れています」

後半はちよつとまじめな活動だった。

「それより、今殺してほしいと言いましたよね？」

「言った……けど」

「では是非自殺するべきです。あなたの自殺が世界を救います」
世界を救うために自殺したくはない。

「私も死ぬべきだと思いますので、あなたが死ぬのを見届けたら、ついでに私も死にます」

「そ、それじゃ私が死ぬわけにはいかなくなるじゃない」

「いえ、死ぬべきです。今すぐにでも！」

これは自殺教唆罪じゃないのか。人口削減のため自殺行動を推奨する会め、自殺幫助が禁止なら会則を徹底させるべきだろう。

言っていることが怖い。行動が怖い。考え方も怖いのに、何を考えているか分からないところも怖い。

まだ襟首を掴んだままの毬音を見る。目が合った。

とりあえず突き飛ばした。

「ふわっ！ なにするんですか！」

「わ、私、今日は家族にご飯作らないといけないから！ 死ぬわけにはいかないから！」

この少女は色々と危ない。私は、この場は逃げることにした。窓から校舎に入り、走って逃げながら考える。

私は死にたいと思っていた。

では毬音、彼女の存在は私にとって歓迎すべきものなのだろうか。そうじゃないかと私は思う。私の自殺は、目的あつてのものじゃない。ただの逃避だ。世界云々は別としても、毬音の勧める自殺には、彼女自身の命という責任が伴う。きっと勝手に一人で自殺しても、そこに責任はあつたのだろうけど、毬音はそれを形にして私に見せてくるのだ。

考えながら逃げていると、いつの間にか家に着いてしまった。

毬音は帰つたのだろうか。それとも私を探しているのだろうか。突き飛ばされたことを怒っているかもしれない。

なんとなく携帯を開いて、時計を見た。

「嘘つき。昨日の晩御飯、買い置きのカップ麺じゃないですか」

翌日、昼休みの屋上で、毬音に開口一番にそう言った。

いつも通りに屋上に来てしまったのがいけなかった。

毬音はそこで少しだけ機嫌悪そうに待ち伏せしていて、今日は私が襟首を掴まれていた。

「なんで晩御飯の内容知っているのよ……」

「ターゲット認定しましたから。JJSは全力であなたの自殺をサポートします。そのためには監視も必要と判断しました」

「うわー、死にたい」

「死んでいいですよ」

殺伐とした会話になってしまった。

毬音と目を合わせづらくて、携帯電話を開く。

「どこかに電話ですか？」

「時間を確認しただけよ。癖みたいなもの」

思えば昔はこんな癖なかった気がする。しかし最近は、時計をよく見るようになっていた。

「どうせ電話する相手もないんじゃないですか？」

「い、いるわよ」

「友達いるんですか？」

「す、少しは」

「何人くらいですか？」

「……………」

「死にたくありませんか？」

「うるさい！」

毬音は本気で私に死んでほしいらしい。そこに悪意はなくて、本当にそれが世界のためとでも思っているのだろう。

とりあえずこんな理由で死ぬわけにはいかない。自殺なんてものはエゴイズムであるべきだ。私が死んだら毬音が死ぬというのも後味が悪い。生きなければならぬ。

生きると言えば食事である。

「……あんだ、昼御飯は？」

「まだですよ？」

「私、今から食べるから。あんだも食べるなら食べなさいよ」

「持ってきてないですよ。今から二人で死ぬ予定でしたもん」

思わずため息をつく。そして私は手に持っていた購買の袋を開けて、パンを二つ取り出した。

「あんだのせいで食欲出ないから。一つあげる」

「自殺前は胃袋空っぽにしておくのがお勧めですよ」

「じゃあなおさらしばらく死ねないわ」

クリームパンを一口かじる。

私そつちがよかったですー、と言いながら、毬音もあんパンの袋を破った。

「んー、今にも自殺しそうな人だと思ってたんですが、意外と死にたがらないんですねー」

「私、そんな風に思われてたの？」

「毎日屋上に向かわれている様子でしたから。飛び降りたいのかなと」

私の普段の生活を知っていたらしい。それでマークしていた結果、昨日のタイミングで現れたのだろう。

飛び降りたかったのは事実だ。しかしこの少女は自分が自殺の足枷になっていることに気付いていない。

「……念のため聞いておくんだけどさ。私の自殺を止めようとしてわざと変なこと言ってるわけじゃないわよね」

「は？　なんで私が自殺を止めるんです？　そんな悪魔みたいな所業、私がするとしても言っんですか？　私が？」

「あ、うん。なんかごめん」

狂信者というのは扱いが難しい。

「ごちそうさま。今日は死なないようなので、私、とりあえず帰ります」

「ふーん。よかった」

「明日も来ます。意味分かりますよね？」

毬音は目が怖い。

「私も来いっていうんでしょ？　気が向いたらね」

「来なかつたら授業中に教室に飛び込んで、あなたが自殺したがつてるって大声で叫びます」

「死ぬしかなくなるじゃん！」

「自分で言ってるナイスアイデアな気がしてきました」

「社会的に自殺幫助だから！　会則違反！」

「んー、残念です」

毬音はパンの袋をポケットに入れると、窓から校舎に戻っていった。

急に静かになった屋上で、携帯電話を開く。

いつもより少しだけ、時間が早く進んだ気がした。

「いつも昼休みにいないけど、どこでお昼食べてるの？」

教室で時計を眺めていると、声をかけられた。

月に数度だろうか、教室でクラスメイトに話しかけられることがある。

誰でもいいから話しかけたいほど暇だったり、なにか興味があったりするのだろう。今日は後者のようだ。

「校舎の隅に、静かな場所があつて……」

「へー、どこ？」

「その、狭い場所だから……」

私の返事に、答える気がないと分かったのだろう。話しかけてきたクラスメイトは気を悪くしたようだった。

しかし屋上は校則上立ち入り禁止だし、あの場所を他人に知られたくはなかった。

「つて、ことがあつたよ」

「もう少し愛想よく出来ないんですか」

「え、悪い？」

「悪いというか、もう私に関わるなオーラ全開です。ATフィールドです」

毬音とはすでに一週間ほど毎日屋上で顔を合わせていた。屋上は寒くなってきたから私は手袋をし、毬音はカイロを持ってきていた。

一週間の間に、毬音のことも少し聞いた。

敬語だったので確認したところ、彼女は一年で後輩に当たるとらしい。変な団体に入っていて周囲から浮いているんじゃないかと聞くと、私よりよほど猫を被るのが上手いとのことだった。成績は悪いらしいが。

「先輩は見た目は明るい系ですからねー。その見た目でダウンナーな

雰囲気かましてるともう周りとしてはなに話したらいいのかさっぱり分かりません。死ねば全部解決すると思います」

「それもいいかもね……」

「お、死にますか？」

「なんかむかついたからやめとく」

毬音は一週間死ね死ねうるさくて、私は密かに人口削減のため自殺行動を推奨する会を死ね死ね団と呼ぶことにしたほどだが、とりあえず私はまだ生きていた。

死ねばかりじゃない話もいくつかした。

例えば三日前に、突然毬音が聞いてきたことがある。

「ところで、趣味ってありますか？」

「特にないけど……」

その時はどうせ趣味もない奴は死んでしまえと言われるのだろうと思っていた。

「趣味はあった方がいいですよ。好きなことでもなんでもいいんですけど」

「毬音は趣味あるの？」

「ありますよ。アニメやら漫画やら好きです。後は自殺を勧めて世界を救うこと」

「その趣味はダメだと思うわ」

彼女自身の趣味には呆れたが、彼女が生きている間のことに関して何かを勧めてくることは珍しかった。

「そういえば、明日は雨だそうですね」

「ふーん」

「やる気のない返事ですが、雨の日は屋上、使えないでしょう」

「じゃあ明日、雨が降ったら屋上には来ないわよ。元々毎日来てたわけでもないし」

「私としては今日中に自殺をしたいなと思います」

「私にその予定はないわ」

「先輩死ぬ気あるんですか」

「あるわよ」

毬音が大きいため息をつく。

「いつまでも先輩に付き合ってるわけにはいかないですよ。他に自殺志願者がいればそっちも説得しなきゃいけませんし、先輩が死んだら私も自殺するという予定がありますし」

「あんたのために自殺するわけじゃないのよ」

「分かってますよ。世界のためです」

「それも違う」

毬音は少しイライラしているようだった。

「先輩、よく時計を見ますよね」

「そうね」

「私こう思うんですよ。先輩、世の中つまらないんじゃないですか？　時計を見ているのは、つまらなすぎて時間の進みばかりが気になるからじゃないですか？」

毬音の言葉に少し思い返してみる。思えば退屈している時ほど時計を見ていた気がする。

「つまらない時に時計を見ているのだとしたら、それが癖になってる先輩はもうどうしようもなく世界が嫌になっているはずなんですよ」

「……そうかもね」

その後は毬音は何も言わずに帰ってしまった。

もしも明日が雨だったら、次に毬音と会えるのはいつになるだろうか。

翌日は晴れでも雨でもなく雪だった。

今年の初雪らしい。この地域は雪が降ると積もるほどになる。

雨なら屋上に行かないとはいったが、雪の時にどうするかなんて決めていない。

午前中の授業は、少し落ち着かなかった。いつもの癖とは関係なく、時計が気になる。

昼休みになつたら、すぐに教室を出て屋上に向かった。

屋上の出入り口まで来て、気付く。

「来てない……」

屋上への出入り口は鍵がかかっているため、使つのはその脇にある窓だ。

しかし窓は外から鍵をかけられないわけだから、誰かが窓から出れば、鍵は開きっぱなしになる。

そして窓の鍵は、今は閉まっていた。

来てないことを確かめて、それから少し驚いた。

私はあの自殺ばかり勧める後輩と会いたがつているようだ。

「あんな性格だから意識しなかつたけれど、毬音は私の数少ない友人と言ふことになるのかしら」

「数少ない？ 唯一じゃないんですか？」

心臓が止まるほど驚いた。なんだかこんなことが前にもあった気がする。

「ま、まり、ま」

「驚きすぎて声も出ないようですね」

いつの間にか毬音が後ろに立っていた。屋上ではいつも座っていたから気付かなかつたが、並んで立ってみると毬音の方が少し背が高かつた。

思えば、私は授業が終わつてすぐに屋上に向かつたのだ。毬音が屋上に来るとしても、私が先に着くのは当たり前である。

私は何とか呼吸を整えると、全力で不機嫌な声を出した。

「あんたはなんでそう、私の独り言を勝手に聞くのよ」

「先輩の独り言が多すぎるんですよ」

「それは自覚あるけど」

「ところで、今日は屋上には出ない方がいいですよ」

毬音の言葉に、首を傾げる。

「なんで？」

「友人たちが話していたのです。雪を見に屋上行こうとか何とか。もうじき来ますよ」

毬音の友人とやらが屋上が立ち入り禁止になっていることを知っているかどうかは分らない。出入り口には鍵がかかっていて、その時に窓から屋上へ出ようと考えるかどうかとも言えないところだ。

しかし可能性がある以上、私たちが屋上にいるところを見つかるのは厄介なわけで、私たちは仕方なくその場を離れた。

いつも屋上で話していた私たちには特に行く場所もなくて、結局毬音の案で長年使われていない空き教室に連れて行かれた。

「この教室、なんで使ってないんだろうね」

「昔自殺した女性との幽霊が出るそうです」

「……………」

「先輩は自殺しても化けて出ないくださいね」

毬音の口調は冗談めいていたが、私にとっては洒落になっていなかった。

「……毬音、今日屋上に来たね」

「はい？ ああ、雪はある意味雨かと思いましたが、万が一先輩が来ていたら、雪の中で待たせるのも悪いかなと」

クラスメイトの話も聞いたしね、と毬音は付け加えた。
「来ないと思ったんですか？ 来ないと思ったのに屋上行ったんですか？ ひよつとして」

「ひよつとして自殺しようと思ったわけじゃないわよ」

「いえ、先輩雪好きなんですか、と聞こうとしました」

毬音が本当にそんなまともなことを喋るつもりだったのかは分からない。

「毬音は雪、好き？」

「好きですよ。見るだけなら」

しかしここが屋上ではなくて、つまりすぐに死ねる環境ではない

からだろうか。彼女はいつもより物騒な言葉を口に出さなかった。

「先日、一年生が数人、屋上で遊んでいた。知っていると思うが、屋上はフェンスもないし、危ないから立ち入り禁止だ。しかし今回の件を受けて、屋上にフェンスを付けて自由に入れるようにしようかという話になった。しばらくは工事をするから、それまでは屋上に近づかないように」

雪の降った日の翌日。今日は晴れ。

朝のホームルームで担任の先生が予想もしてなかったことを告げた。

「ええ、私のとこのクラスメイトです。騒ぎすぎて先生に見つかったようで」

昼休みに昨日と同じ空き教室で出会った毬音に確認すると、遊んでいた一年生というのはやはり雪を見に行ったという毬音のクラスメイト達だった。

彼らか彼女らかまでは知らないが、結局窓から屋上に出て、そのまま雪合戦をしていたらしい。自殺を考えていた私が言うことではないが、フェンスのない場所で酔狂なことである。

「工事中はもちろん、工事が終わってからは正式に開放されるようですから、今まで通りの場所ではなくなりますね」

「そうね……」

「フェンスもつきます。簡単に自殺できる場所、とはいかなくなりました」

「フェンスがつくだけじゃない」

「フェンスでも大問題です。例えばチキンな先輩では、フェンスを乗り越える段階で自殺する気がなくなってしまうでしょう」

「そんなことは……」

言い返そうとするが、確かに私ではできない気がした。

「私、考えを改めました」

「どういう風に」

「先輩はすぐ死ぬ人だと思っていましたが、真逆です。臆病すぎて慎重すぎて、全然死なないタイプです」

褒められているのか貶されているのか分からない。たぶん褒めても貶してもいないのだろう。

「JJSは、先輩のターゲット認定を解除しました。今後組織だつて先輩のサポートをすることはないでしょう。残念でした」

「あ、そうなんだ」

「ただし私個人としては別です。先輩が死ぬのを見てから自殺する予定ですから。私が世界のために死ぬには、先輩に自殺してもらう必要があります」

毬音はそう言つて顔をしかめた。

「後押ししなければ先輩は死にたい死にたいと言いながらダラダラと生き続けるタイプです。私、それがよく分かりました」

「うん、たぶん私、しばらく自殺はしないと思う」

毬音は残念そうだった。毬音は自殺は素晴らしいものだと思っているようだから、きっと私のことをチャンスを棒に振ったように思っているのだろう。

「そつえば先輩、今日は時計を見ていませんね」

毬音に言われて、ふと気付く。

「毬音は、私がつまらない時に時計を見ているって言ったよね？じやあ私は今——」

（後書き）

ちよつと変な友情モノを書きたくなった。場面変化が多すぎるのは反省点。

注意

この作品は自殺を勧めるものではありません。
作中、毬音がやっている行動は自殺教唆未遂、或いは殺人未遂とも
なりえます。絶対に真似しないでください。

学校の校則は守りましょう。

ああ、なんて教育に悪い作品。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0996z/>

屋上短編

2011年12月3日20時48分発行